
ONE PIECE ?黒髪少年の描く世界?

霧宮 海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ONE P I E C E ？黒髪少年の描く世界？

【Nコード】

N 7 4 3 4 Z

【作者名】

霧宮 海

【あらすじ】

時は大海賊時代。イーストブルーに住む少年が持つ夢は『画家』。なんとも地味な夢だと人は言うがそんな事関係ない。いつか世界政府の隠している現実を描いて暴きたい。そのチャンスをつかがっていたとき、少年の目にした新聞で少年の人生が変わった！この話は少年大和が海賊の頂点を麦わら一味と目指す話！

ブローグ

時は世界政府時代

政府の者が全てを握っていた時代

オレは新聞に釘付けになった。

あのロジャーが死んだ。

海賊王と呼ばれた彼が。

でも彼は死に際にとんでもない言葉を残した。

「俺の財宝か？欲しけりゃくれてやるぜ…探してみろ。この世のすべてをそこに置いてきた！」

その一言で全ての人が立ち上がった。

これに乗らない手はない。

これを逃したらきつと俺の夢は叶わない。

少年が立ち上がる。

「じいちゃん！俺海賊になる！そんで世界一の画家になって裏の世界を写すんだ！」

イーストブルーに浮かぶ『ニホン』というちっぽけな島。

その島で育った少年大和^{ヤマト}。 17歳。

これはその少年の半生を描いた話????

プロローグ（後書き）

短くてすいません！

本編いつきまーす!!

第1話

大和VSじいちゃん

「じいちゃん！俺海賊になつて裏の世界を描くよ！！」

俺は新聞を見るなり一緒に住んでるじいちゃんのところへ飛んで行った。

俺はじいちゃんと二人暮らし。母さんと父さんは自分の兄と一緒に別のところに住んでいる。三人は『天竜人』なんだ。俺は母さんと母さんの浮気相手の間にできた子だから『半天竜人』？

正直天竜人は最悪だと思う。言葉使いおかしいし奴隷買ってるし。だから俺は母さんの浮気相手の父さんと一緒に住んでいる。じいちゃんはいきなり転がり込んできた俺を歓迎してくれた。今まで邪魔者にされていて家でも奴隷と同じような扱いだった俺にとってその暖かさはすごく身体に染みしたのは今でも繊細に覚えている。

じいちゃんは庭で絵を描いていた。俺が画家になりたいのは多分じいちゃんみたいな絵が描きたいからだと思う。悔しいけど。俺は身長が175cmは超えてつからじいちゃんよりでかいだろう。俺がじいちゃんに勝ってるのはそれくらい。強さも結構強いつもりだったけどじいちゃんの前ではかなわなかった。だからそれいらいずっと鍛えている。

「今なんと言った」

「海賊になりとうございます」
冗談ぽく言ってみる。

「ばっかもんがああ!!」

「うお! あつぶねえ何すんだよじいちゃん!」
いきなり絵筆を投げてきたのだ。絵筆は畳に刺さっている。良い子はまねしないでね

「なにを言うかと思えば何事じゃ! 海賊なぞもつてのほか!」

「じいちゃんこの新聞見たか？」

まじで怒っているじいちゃんとは正反対にニツコリ笑って新聞を差し出す俺。じいちゃんは無言でひったくり、目を丸くする。

「ロジャーが…死んだか」

じいちゃんがとても懐かしそうな目をするから驚いた。だがそれはほんの一瞬で。

「大和！わしと勝負せい！わしに勝ったら小舟も用意してやろう」
しかめっ面で言う。俺が言い出したら止まんない事を知っての上での判断だろう。

「うほー！じいちゃん太っ腹！サンキュー！！」

「わしに勝ってからじゃ！道場に来い！」

「素手でわしに背中をつかせたらお前の勝ちじゃ」

「ありがとうじいちゃん！食料もくれたらもっと嬉しいんだけど」

「勝ってからじゃと…言っておろう！」

いきなりじいちゃんのローキックがくる。

「うおい！不意打ちはひでーよ！」

慌てて上に飛び退いて一回転して着地。

「海軍なぞ卑怯者ばっかじゃ」

してやったりと笑うじいちゃん。俺の記憶が正しければこの人もう70はいつてるはずなんだけど。

「じいちゃんぎっくり腰になっても恨むなよ！」

じいちゃんの顎めがけて下から足を振り上げる。

「遅いわ！」

振り上げた足を足で蹴られる。

「あら。自信あつたんだけどな」

体勢を整え、今度は顔面に向かってパンチをくり出す。だがそれもじいちゃんの手によって塞がれる。

「遅いのう。わしゃ眠くなりそうだ」

「これだけで終わりだとても？」

逆の手で頬に向かってパンチをくり出す。

ドゴッ

綺麗にヒットする。でもこれだけで倒れてくれるじいちゃんじゃない。

「少しはできるようになったな」

「一番最初の時は俺もショックだったよ？一発も入らない上に一発でダウンだもん」

「今はどうかの？」

真正面からパンチがくる。突然の事だったので対応できなかった。

ドガッ

クリーンヒット

あー。俺の前でたくさんひよこが飛んでるよー。でもここで倒れるわけにはいかない。このチャンスを逃したらもう機会がない気がするから。

世界政府は絶対何か隠してる。それを暴いてやりたい。そうするには海賊になるのが手っ取り早い。海軍の方から寄ってきてくれるからだ。

倒れそうになるのをグッと耐える。

「くっ」

相変わらずじいちゃんのパンチは効く。じいちゃんの横を駆け抜け、首に腕をかける。

「!?!」

「うおおおお!」

どーおおおおん…

パラパラパラ

天井からなんか降ってくる。目の前には仰向けに倒れたじいちゃん。

「か……っ た…?」

「ふん、わしの身体が衰えただけじゃ。だが約束は約束だ」

来い、と言いだ場を出て行くじいちゃん。慌ててついていく。

腰何ともないのか？俺結構本気の一撃だったんだけど。

第1話

大和VSじいちゃん（後書き）

話が進まないいいいい！！

第2話 悪魔の実

「いやーじいちゃんには感謝だな！うん。船も使いやすそうだし食料もくれたし！」

ほんとに感謝している。今大和は出航して海の上だ。そしてそこで重大な事に気づく。

俺航海術持つてねえええ！！

てか俺何処目指してんの！？ニホンはイーストブルーだけど最早どっちがイースト！？じいちゃんがくれた食料はおよそ一週間分。

少なくとも一週間は生きれる。

本物の海賊に会わなければ。

とりあえず一週間は安心して島を探せるといふ事。

本物の海賊に会わなければ。

「おい！あそこの小舟何やらたくさん食料積んであるぜ！」
「ぼったくれ！」

「「「「「おおおお！……！」「」」」」

海賊会っちゃったーーーー！！

なにこれ噂をすれば影！？俺噂する人いないんだけど、俺一人ですってただけー！！

そんな事を思ってる間に近づいてくる海賊船。クルーは30人位らしい。

「我ら“悪武劣海賊団”の名にかけてー！！」

「「「うおおおおー！！」」」

ちよつと待てええ！！こいつ等何！？何“悪武劣海賊団”て！暴走
族みてえ！カタカナにしたら“オムレッツ海賊団”だし…

海賊達が小舟に乗り換えてこちらへ向かってくる。

本当何こいつ等。

アホ？

全員でこっち来たら船とられるに決まってるじゃん。

その通り。クルー含め船長まで小舟でこっちに来てしまったのだ。
馬鹿の極みである。

「これは盗らない手はないっしょ！」

よっこいしょと食料の入った袋を持ち上げ

飛ぶ。

「いよつつと…」

船の甲板の端に着地する。

「ふーん。結構良い船だな」
周りを見渡して言う。

「んじゃおっさん！こちらの船はありがたくいただきまーす！」

「な！おいお前等！急いで船に戻れ！あの船にはせつかく見つけた
悪魔の実があるんだ！」

「「「「お、おおお！」」」」

悪魔の実？なんだそりゃ悪魔みてーにマズいってことか？なんでそんなやつ大切なんだよ。

急いでオールを漕ごうとする海賊達。

「あそーだ。忘れてた。おっさん達悪いね、そのへん爆弾落としたり
やったかも！ポケットに入れるべきじゃないな！」

「「「「「へ？」「」「」」」」

おっさん達が涙目になりながらつぶやいた次の瞬間

どごおおおおおおん

目の前で大爆発。

「うっひょー！ー！すんげえ！てか何でじいちゃんこんなの持って

「たんだ？」

出発前にじいちゃんに渡された2cmくらいの黒い弾。

『海賊達が寄ってきたら初めはこれを撒くといい。花火の実としての。わしも若い頃はこれで遊んだもんじゃい』

ガハハハと豪快に笑って渡してきた。じいちゃんはもしかしたら海賊だったのかもな。爆薬で遊ぶとか普通じゃねーもん。

帆を張って風に任せて船を進める。

俺のモットー

『まあどうにかなるっしょ』

船内を見て回るとまずキッチンがあった。冷蔵庫をのぞくとそこそこ食料はあった。飯にも30人いたしな。これで一ヶ月は保つ。て
いうか保たせる。

ん？冷蔵庫の横にある箱なんだ？宝箱みて！。

開けるとさくらんぼのようなものが入ってた。なんだ宝じゃなかった。何故さくらんぼようなものかって？色がまずおかしい。次に何か変なぐるぐるみたいな模様が入ってる。

でもこれは…食べてみるしかないっしょ！

さくらんぼもどきを口に含む。

「おえっ。何これ。げろまずっ。」

だがここで引いたら男じゃなああい！！

目をしかめて全部口に放り、飲み込む。

ドクン

ドクン

ドクン

「な、なんじゃこりゃあ!!?」

第2話

悪魔の実（後書き）

もう少しで麦わらちゃん達出します！

第3話 麦わらの一味

「なんじゃこりやああ!？」

変な実を食べ終えた瞬間大和の身体に異変が起き始めた。すぐさま果物のはいつていた箱に飛んでいく。中には研究所みたいな紙が入っていた。

「こ、これになんか書いてあるか!？」

急いで紙をめくっていく。

「あ、あつた! なになに: これは悪魔の実で『クサクサの実』! ?
自然系。ロギア さつきおつさん達が言つてたのはこれのことだったのか!
え、おいちよつと待てよ! 悪魔の実を食つたら一生力ナツチ! ? 航海始めにこれかよ...」

落胆してしゃがみ込む。大和の指が葉になりハラハラと落ちていったのだ。もちろん戻れゝって念じたら戻ったけど。

「ああああ! これから一生力ナツチかよ...」

どうするよー。これで俺海に落ちれねーぞー。

甲板に戻り寝っ転がる。

「いや、俺のイトコは＋思考なとこだ！戦闘に使えねーかなー」
それからの俺の趣味はその能力で何ができるか考える事と絵を描く事だった。画材も積んであったから助かった。海と空というのは相性がいいらしい絵になる。

いやでも俺も海賊なめてた。本当認めるよ。

もうかれこれ航海を始めた日から2ヶ月経っていた。食料なし。戦えてもこれじゃ意味ねーしなー。

そういえば寝るのが一番体力使わないって言うよな…

ー眠りすつか…

そうして意識が遠のいた

「…と、ちよつと。ちよつと起きろつつてんのよ!」
耳たぶを掴まれて大声で叫ばれる。

「うわぁ!なんだ!？」

慌てて飛び退く。目の前にはオレンジ色の髪の女の人が立っている。
顔からしてずいぶん強気そう。

「あ、起きた。ルフィーー!起きた!」

「うおお!そおかあ!」

そう言いマストの上から降りてきたのは麦わら帽子をかぶった男の子。
こっちは気さくそう。

「つて、ええええええええ!？腕がのびてる!？」

そう。ルフィーと呼ばれた男の子はマストの上から腕を伸ばして下に
降りてきたのだ。

「ふふふつ、そうね彼は悪魔の実の『ゴムゴムの実』を食べたから
オレンジ色の髪の少女と一緒にいた青いロングヘアの子が説明して
くれる。

「私たちの船があんたの船を偶然見つけて何かないかと思って探っ
てたらあんたが倒れてて拾ってやったのよ。感謝してよね!」
オレンジ色の髪の少女が腕を組んで言う。

「ナミさんたら、一番頻繁に彼の様子見にきてたじゃない」
オレンジ色の髪の少女はナミというらしい。

「び、ビビ！余計な事言わないの！」

ロングヘアの少女はビビというらしい。

「今サンジさんが食べ物を作ってくれてるわ。」

「あ、ありがとう」

「しししっ、おいお前、仲間んなれ！」

「え」

「ちょっとルフィ！？こんなよく知らない人を！？」

「いいじゃねーか仲間は多い方がいいんだ！」

ボタン

「おお。起きたのか。本当は野郎に出してやるメシなんざねーんだ
がナミさんが出せって言っしょ。おら」

そう言い黄色の髪の人のご飯を置いてくれる。たぶんこの人がサン
ジという人だろう。

ていうか何この飯。めっちゃ輝いてんだけど。

普通の空腹でも輝いて見えたんだろうが飢えきっている俺にとつちやもつ仏が見える程だった。思わず食らいつく。

「なんあこれ。めっちゃうまえ」

食いながら言ってるため言葉がおかしくなる。

「だろ。クソうめえんだよ。俺の飯は」

サンジがニカツと笑ってタバコの煙を吸う。返事をする間も惜しく、大きく頷きながら口にご飯を詰め込む。正直いつもならタバコの煙は苦手だが全く気にならなかった。

「うおっ！？おおおおめー何もんだ！？」

ん？船室から鼻の長いのが出てきた。

「ピノキオか？」

「ウソップだああ！ピノキオて何だよ！」

おお！ツッコミ担当か！

「ウソップ、それは仕方ないわよ。名前聞いてなかったんだし」

「ん？おお、そうか！じゃあ仕方ないな！オレはこの船の船長、キヤプテンウソップだ！」

腕を腰に当てて上を向き高々と言う。

「へー」

「嘘よ」

「へーーーーー！？」

「彼は狙撃手よ。彼の腕はすごいんだから！そういえば…チョッパ―君は？さっきまであなたの看病してくれてたのよ」

ビビが周りを見ながら言う。てかすげー嘘つくな…嘘つきのスケー

ルが違う…

「あ」

ビビがマストの下を指す。

「…この船は鹿を買ってんのか」

そこにいたのは鹿みたいなもの。なんか隠れようとしてんのかもし
んないけど丸見えだ。

「あれがチョッパー君よ。ついさっき仲間入りしたね」

「そうか。看病してくれてたんだってな。サンキュー」

チョッパーの方にニカツと笑う。

「別にそんな事言われてもうれしかねーぞ、こんにやろう！」

いやめっちゃ嬉しそうな顔してるよ？身体くねくねして踊りだしち
やってるよ？

「あれ？ミスター武士道はどこかしら」

第3話 麦わらの一味（後書き）

長くてすみません!!

ここまで読んでくださりありがとうございます！

第4話 自己紹介

「あれ？ミスター 武士道はどこかしら」

「Mr. 武士道？」

「ええ。三刀流の剣士でこの一味の残りの一人よ。
辺りを見渡して言う。」

「へー三刀流ね…すげ…！」

ザンッ

「え！？」

「切れた…」

「どうなってんだ？」

「あーら。斬られちった」

剣士に腹を切られ上半身と下半身が別れる。

「奇妙な身体してんじゃねーか」

すぐに葉を集めもとの身体に戻る。

「まあな。ここの船長とおあいこだ」

「仲間になるにしては怪しすぎる」

「どうしろと？オレ身分証明書ねーっすよ？面接受けねーっす。戦うってもオレに物的な攻撃は利かない」

つかの間の沈黙。

「どうやら無駄のようだな」

緑頭の剣士が剣をサヤに納める。彼は腹巻きを巻いていてこちらとしては何とも気の抜ける格好と言えた。

「よ、よほほほーし！この俺様が面接してふさわしいか判断して

やろう！
」

びびりまくってんじゃないか。

ウソップが机を持ってきて俺とウソップの間に置く。これ面接っていうか取り調べ？ライトあるし。俺そんなに怪しかったかなー。さっきまで一番俺の事疑ってたゾロとか言う剣士はもうあそこで寝息たててんだけど。

「どっから来た」

「ニホン」

「趣味は」

「絵を描く事」

「特技は」

「絵を描く事」

「この一味に入ってやりたい事は」

「絵を描く事」

「出身以外全部『絵を描く事』じゃねかー!!」
おお、つつこみきた!

「しししつ。んじゃおれも質問」
ルフィが机の横に立つ。

「夢。なんだ？」

「裏世界の真実を描く事!」

「うし、合格!仲間んなれ!」

「よろしく。」

というわけで俺はめでたくこの一味に歓迎されたんだ。

「ねえあなた名前何？まだ聞いてないわ」

ナミが言う。そーだった。仲間になるってのに名乗ってないのはやばいな。ナミが椅子に座っていたのであぐらをかいた。

「ヤマトだ。漢字では大きいに平和の和だ。」

「ふーん。カンジとかよくわかんないけどヤマトね！よろしく！」

ナミが笑って言うてくれる。

「にしてもさっきのなんだ？自然系ロキアの悪魔の実ってことは確かだが」
サンジがいう。それもまだ言っただけ。

「『クサクサの実』だ。」

そう言つて身体からいろんな葉を出してみせる。この数ヶ月でわかつた事だが葉であればいろんな種類の葉が出せるらしい。盾になりそうなでっけーのから剣になりそうなちっこいものまで出せる葉の種類は多種多様。でもここは無難にもみじにしておいた。

「わあ…きれい…」

ビビ達が驚き、みとれている。確かに俺の出す葉は綺麗だと思う。

この能力を手に入れてからこの葉を舞わせて絵を描いた事も沢山あった。

「だろ？」

少し得意げになる。

「それにこの能力は戦闘でも役に立つしな」

そういえばこの船は今どういう状況なんだ？何処に向かつてんだろ。そのことをナミに聞いてみるとどうやらビビは王国の王女でビビの国が『バロックワークス』という組織によって崩壊する危機だという。そこでバロックワークスを倒すべくビビの王国であるアラバスタに向かっているのだという。大雑把にまとめると。

途中でチョッパーが仲間になった話とかもあつたが結局仲間になつたんだ。それでいい。

「それにしてもこの一味には能力者が多いな」

俺も含めて3人。ビビも入れて8人の中でだ。これは結構多いと言えるんじゃないか？

「ルフィが『ゴムゴムの実』。俺のが『クサクサの実』。チョッパーのは…『シカシカの実』か？」

「『ヒトヒトの実』だ！元がトナカイなんだよ！」

チョッパーがつっこんでくる。なんだ突っ込み多いな。

そうして俺たちの船はアラバスタへ向かう。

第4話 自己紹介（後書き）

コメ&感想よろです！

第5話

オカマ

とりあえずこの一味に歓迎されて一安心。

…という訳にもいかないんだなあこれが。

問題 1

食料がない

問題 2

カルーというビビの連れてる『超カルガモ』を餌にサメとか海王類（馬鹿でかい海の化け物と思ってくれている。始めて見た時は俺もぶったまげた）を釣ろうとする人が現れる。
ビビが阻止。

（ちなみにルフィとウソップ）

問題 3

それで結局サメも海王類も釣れず変なオカマが釣れた。

「いやーホントにスワンスワン」
あぐらをかいて謝っている（のか？）。ルフィとウソップが釣った獲物はとても食えるものではなく期待を裏切るものだった。しかも釣れた後海に落ちて再び釣り上げる羽目になったのだ。ビビにとつては食われなくて一安心なのだが。

それにしても奇抜な服装だ。なんというか…何ともいえない。頭の上にボンボンが二つ付いていて背中からは二匹の白鳥が左右にのぞいている。んで背中には『おかま道^{ウエイ}』と書いてある。自分はおかまですと宣言しているのはある意味清々しい。そんでまあバレー靴を履いているあたりからバレーをしているんだろう。

「見ず知らずの海賊さんに命を助けてもらうなんて、この御恩一生忘れません！！…あと温かいスープを一杯頂けるかしら」

「……ねえよ！！」「……」

「こっちが腹へってんだ！！」

その場にいるビビ以外全員がつっこむ。

「ほんとにこっちが食いもん欲しいくらいだよ」
ため息まじりにつぶやく。

「アラー!!」

ビビを見つけてオカマが言う。ビビは見つけてほしくなかったという顔。

「あなたカーワイーわねー好みよ？食っちゃいたい、チュツ？」

「……う……」

はい嫌われたー！絶対嫌われたー！まあだよなー。オカマに好かれていい気分の女がいたら是非お目にかかりたい。

そういえば…

「なあ。さつき泳げてなかったよな。悪魔の実の能力者か？」
おかまをスケッチブックに描きながら聞く。

なんで絵描いてんのかって？

いや目の前にこんなカッコした変なオカマいたらスケッチしたくなるよ。もちろん取っとかないけど。描いたら覚えるっていうだろう？

「そうよう！それじゃあちしの能力見せちゃうわよーうー!!」
頼んでねー。

パンツ

「うべっ！！！」

「！！！！」

ルフィがオカマに右手で顔面パンチを食らわす。

「何を……！！？」

ゾロが鞘に手をそえる。

「待……って待……って待……ってよ……う、余興代わり
よ……う……！！」

「な……！！？」

ゾロもあつけにとられる。俺だって勿論驚いてるよ？ていうか船員
全員驚いてる。

さっきまでオカマ野郎だった奴がルフィになっているのだから。そ
の後のオカマの話によるとオカマが食ったのは『マネマネの実』ら

しい。右手で相手の顔に触れ、左手で自らの顔に触れると触れた人の顔になるのだという。メモリー機能付きで過去に触った人の顔は忘れないらしい。実際に過去触った人の顔を見せる。確かにこれはすごい。その後ナミ、ゾロ、ウソップ、チョッパーを触って遊んでいた。

ちなみにこの能力では体型も本人と全く一緒になるらしい。

この能力にはルフィ達（ルフィ、ウソップ、チョッパー）も大喜びで何かもう親しくなっていた。あんたらまだ会って数分だろ…。ナミとゾロも呆れてそれを見ていた。

すると向こうから何やら叫びながら船がやってきた。

「なあ。あの船じゃねーの？お前が乗ってた船。」

「あら！？もうお別れの時間！？残念ねい！」

「「えー！ー！？もう行くのかー！？」」「」」

「悲しむんじゃないわよう！…友情って奴あ…つきあった時間と関係ナッスイングー！」

オカマが親指を上突き立てて言う。

あ。そうだ。

「なあ。よかつたらこれ」

さっきまで描いていたオカマの絵を渡す。

「あら！？あちしじゃなあーい！かわいく描いてあるわねーい！！貰っていくわ！」

「それをよく見て心を入れ替えるといい」

「ん？どういう意味かしら？？まあいいわ！行くわよお前達！」

自分の船に乗り換えて言う。ていうか…自分の絵を見て目覚ましてほしかったんだが逆効果だったか？

「「「「「はい！M r ・2ボン・クレー様！！」」」」」

「「！！？M r ・2！？」」

ん？何でみんな驚いてんだ？

第5話

オカマ（後書き）

あっけましておめでとございますですー！！

投稿遅れまして…

うち的にはボンちゃん大好きなんですよねー。うちの中ではベスト10に入るのではないでしょう。みなさんはどうでしょう？？

華やかに出してあげたいです。

コメ&感想よろしくです！途中までしか読んでない人でも是非？

…ハートはちとキモかったっすね…

第6話

オカマの正体

オカマの名前がMr・2ボン・クレーだという事がわかって船内に緊張が走る。

何で？変わった名前だけなんでこんな空気？
それを察したらしくナミが説明してくれる。

「さっきビビの国を危ぶませてるバロックワークスって説明したでしょ？」

話を聞くとどうやらそのバロックワークスの幹部にはやはりコードネームがあり、男は数字＋Mr・。女はミス＋イベント日という具合らしい。今までであった中で例をあげるとMr・5、ミス・バレンタインというかんじだ。男女二組のペアらしい。

「へー。んでさっきのオカマがそのバロックワークスの幹部だったと。」

「そうよ。…まずいわね、あいつが私たちを敵とみなしたら…」

「仲間を信用できなくなる」

俺が言つとナミも我が意を得たり、と頷く。

あれ。でも…

「さっきビビが話してくれた話によるとビビはその組織に潜入してたんだよな。あいつの事見た事なかったなか？」

ビビが頷く。

「ええ。見た事はなかったんだけど噂には聞いていたわ。まさかあいつだったなんて…！」

「うわさって？」

「大柄のおかまでオカマ口調、白鳥のコートを愛用していて背中に『おかま道』^{ウエイ}とあるって…」
「『『『気づけよ』『』『』』」

この件で分かった事は二つ。

1、バロックワークスの幹部にオカマの能力者がいる。

2、ビビは鈍い！

「ちょっと俺サングラと二行ってくる」

コンコン

「なんだ」

ガチャ

「ああヤマトか」

よかったー。名前覚えてもらえてたー。

「今ちよつとあつてな。報告に。」

「?そうか」

相変わらずフライパンをいじりながら言う。

「サンジくーん。ちよつと来てー（裏声）」

「んナーミすわーん!!僕に用事でも!?!」

サンジがすごい勢いでこつちを振り返る。確かにこれはヤバい。俺がナミの声真似しただけで目からハート飛び出てる。あのオカマがナミに化けたらサンジは戦闘不可能だぞ。ビビに聞いたところサンジは極度の女好きというかフェミニストというかとにかく女は蹴らないらしい。いや蹴れないのか?いやいやそしたらただのヘタレになっちまう。蹴らないんだ。

「あれ、ナミさんは?」

はてなマークを浮かべるサンジを無視して鍋に近寄る。

「これあんこ!何に使うんだ?」

「ん?ああ。『今日のお菓子』だ。てめーニホンから来たって言ったな。倭の国だろ?その菓子は俺も好きなんだ。ってことで作ってみた」

サンジが他のを指差して言う。そこにはいろんな種類のお菓子があつた。沢山の種類があるのはおそらく二ホンの菓子が小さく一人用が多いからだろう。

「おおお！みたらしー！」

俺がみたらしを指差して言う。

「好きなのか？」

「ああ。大好物だ！でも……」
少し考え込む。

「装飾が気に食わない」

「俺の装飾はクソ完璧だ！！」

サンジが食ってかかる。やべ、地雷踏んだ！よほど頭に来ているらしくクソの使い方か何か違う！

「ち、ちがうちがう！文句とかじゃなくてこう倭の国の菓子ってよく下に葉っぱとか敷いてあるんだ。こういつ」
手から笹や柏を出してみせる。

「彩りが増すだろ？もともと緑の国だしよ」
お菓자에敷いてみせる。顎に手を当てて考えるように見ていたサンジが顔をあげる。

「そういう事か。確かにな。ずっと海の上にいると葉っぱとか忘れちまうんだ」
よかった。とりあえず安堵のため息だ。

「葉っぱならいくらでも出せるから装飾に必要なになったら言うてく

れ」

じゃ、といって退散する。みんなの元に戻るとチョッパーがあわあわと包帯を用意していた。

誰かケガでもしたのか？あいつらに限ってないと思うんだが…

第6話 オカマの正体（後書き）

話が進まないー!!

ううう。すんませんー。

コメ&感想よろしくです。

第7話

ナノハナ

「何やってんだ？」

みんなのそこに行くとお互い包帯を腕に巻き合っているところだった。

ケガって訳じゃなさそうだが…

「あ、ヤマトさん！ヤマトさんもこれ！」

そう言っただけで包帯を渡してくる。何で包帯？俺ドコもケガしてないんだけど。

「ゾロがな、あのオカマ対策をしようって。はい、はさみ」
「チョッパーがはさみを渡してくれる。」

「あんがと」

「ゾロが？おい、もうそいつがオカマ野郎なんじゃないか？」

「てんめ…！いい度胸してんじゃねエか…！」

「ははは！Just a joke（冗談だよ）」

腕に結んで縛る。サンジもいつの間にか呼び出されていてウソップからそのMr.2について聞いていた。

ルフィが左腕を前に突き出す。他のみんなもそれにあわせて突き出す。

「よし、とにかくこれから何が起ころうとも、これが仲間の印だ！」
「ああ」

「上陸するぞ！！飯屋へ！！……あ、あとアラバスタ」
「アラバスタはオマケかよ！」
「すかさずツツコミが飛ぶ。」

船が岸に近づいたとたんルフィは飯屋へ目がけて行ってしまった。
俺も画材買ってーな！。でも俺もその前に飯だな。

「いつドコにすれば？」

「私とかビビ、ウソップとかはたぶん大体ここにいるわ。ゾロは使いにすから時々いないかもしれないけど」

「ておい！俺使い決定かよ！」

「なーによー。あんたローグタウンでの借金まだあるんだからそれ返済してから言ってよね」

「は！？それはウイスキーピークンときとかで返したる！？」

「半分ね。それがまだ残ってるわ」

「こんにやろ」

「んナーミすわわあーん！俺が買い出し行ってきたす！」

「あらほんとー！？じゃあサンジ君には洋服類頼もうかしら」

「了解しました！」

その後ハリケーンのごとく買い出しに行ったサンジ。ゾロも渋々行く。なにやら俺が仲間に加わる前いろいろあったらしい。

「という訳で。ヤマトも行ってきていいわよ。ここから船も見えるから留守番もいらないしね」

それじゃあということでありがたくおことばに甘える。

「飯屋飯屋：意外にないものだな。香水屋ばっか」

周りを見渡して言う。すると道のいつち番奥に飯屋と思われる建物が見える。

やっとだ。数日食っていなかったから早く行きたくて草になって飛ぶ。端から見たら気味悪そうだがみんな各々の買物に夢中だ。

「着いたあ。おじさん！飯！三人前！…ん？」

何か妙に静かだ。ん。前にいんのだれ？手前にいるのが十手を背負っていて背中に『正義』と書かれたジャケットを来ている。んで葉巻を吸っている。厳つい顔で何か迫力負けしそう。

それに比べておくのカウンターに座っている男は気さくそうな顔でそばかすがあり、上半身はだか。何で訴えられないんだろ…。いかんいかん、話がそれた。黒い膝までのズボンをはいていて頭にはオレンジの帽子。丸い顔みたいなモチーフが二つ付いていて一つは笑ってる顔、もう一つはなんか…よくわかんない変な顔。なんかホントにどう説明したらいいかわかんない。

そこでその二人がなんか問題があるらしく、客がみんなさけている。なんで？

「すいませーん。あの、カウンターの席空いてますよ？」

葉巻の人をツンツン突っついて言う。

「ああ？」

「うわっこっわー」

「すんません。なんでもないです」

一礼してカウンター席に着く。

「おじさん！飯！三人前！」

「え…あ、ああ、少々お待ちを…」

店主もどうしたらいいか分かんないという顔。しばらくしたら飯が出てきた。

「おおーひさつびさの飯イ！んおぐ、んむんむ、うんめええー！おじさん最高！」

「あ、ありがとよ…」

「プハハハ！まさか海軍の前でこんなににぎやかに飯を食う奴がいるなんてな！」

右に座ってたそばかすの男が笑う。海軍？

「お前が海軍なのか？」

「あ？いやいや俺あ海賊だよ。海軍はこっちだ。」

そう言い葉巻野郎を指差す。まじでー。

「それはそれはお仕事ご苦勞様です。」

そう言い座りながら一礼してまた食べ始める。

「プハハハハハ！海軍としてもその態度か！気に入った！名前は何？」

「ヤマトだ」

「何やってんだ？」

「海賊兼画家」

「「「海賊！？こんな奴が！？」」」」

周りの客が驚く。こんな奴がッてひどくね？

すると知った声が聞こえてきた。

「ムゴムのおおロケットォー……!!」
ルフイが店内に飛び込んできたのだ。

第7話

ナノハナ（後書き）

コメ&感想よろしくです！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7434z/>

ONE PIECE ?黒髪少年の描く世界?

2012年1月8日19時52分発行